

報告論文

クラシック音楽の生演奏が未就学児にあたる 影響についての一考察

戸川 晃子

A Study of the Influence of Live Performances of Ordinary Classical Music for Pre-school Children

Akiko TOGAWA

Summary

When we categorize classical concerts according to the types of audience, there are three types. Those are concerts for pregnant women, concerts for parents and children (which often consists of numbers preferred by children) and concerts for general audience which prohibiting pre-school children entering venues.

Among those, it is uncommon that classical concerts allowing pre-school children to enter venues, and consist of ordinary numbers.

This paper is based on the thought that listening to live performances of classical music is effective for all ages including pre-school children. And it argues about the potential of classical concerts allowing pre-school children to enter venues, and consist of ordinary numbers through holding experimental concerts.

キーワード クラシック音楽 未就学児 生演奏 コンサートプログラム

要 旨

クラシック音楽コンサートは、対象とする観客によって分別した際、マタニティーコンサート、親子のためのコンサート、そして「未就学児入場不可」のコンサートと、大きく3つのスタイルに分かれると考えられる。しかし、未就学児の入場が可能でなおかつ、一般的なクラシック音楽で構成されたコンサートについてはあまり例がないと言える。本研究は、クラシック音楽の生の演奏を聴くことは、未就学児を含めた多世代に有用であると考え、未就学児における、いわゆる単なる「子ども向け」ではない、一般的クラシック音楽プログラムコンサートの有用性について考察するものである。

1. 序説

1-1 研究目的

クラシック音楽コンサートは、その多くが入場を小学生以上に限定されており、未就学児が聴くことのできるのは、保育所や幼稚園における訪問コンサート、「親子のためのコンサート」といったものに限られている。本論では生後1年を乳児、生後1年から就学前までを幼児とするが^{注1)}、このようなコンサートにおいては、乳児・幼児たちを楽しませる、または喜ばせることを目的とした選曲がなされ、音楽以外の要素を含めた「子ども向け」プログラムが多く提供される一方で、クラシック音楽の選曲は避けられる傾向にある。ここでいうクラシック音楽とは、ジャズ、ポピュラーなどに対して西洋の伝統的な芸術音楽^{注2)}を意味する。母親の胎内にいる時期でのマタニティーコンサートや、就学児以上になれば触れることの出来るクラシック音楽が、乳幼児時期にはその機会が極端に少ないことは問題であると筆者は考える。

乳幼児にとっては、どのような音楽も初めて触れるものである。「子ども向け」の知っている曲でなければ子どもたちは聴かないであろうという、大人たちの「退屈なクラシック音楽」という先入観を外し、「子ども向け」ではない、通常「未就学児入場不可」のコンサートにおいて選曲されるクラシック音楽プログラムを、あえて乳幼児を対象に開催した場合でも効果があると仮定し、研究・考察を試みたい。

1-2 先行研究

胎児や乳幼児を対象に、マタニティーコンサート、親子コンサートにおいて、従来どのようなことが実践されているのか、また音楽を聴くことが、どのような効果を得るのかについて述べたい。

「マタニティーコンサート」については、例えばピアニストの岡崎ゆみが「プレママ&プレパパクラシック」と題し、出産を迎える母親と父親を対象に、未就学児については入場不可として、クラシック音

楽を毎年提供している¹⁾。プログラムは、後に本論でも述べる、成人に与える効果が期待できるクラシック音楽の曲目に加え、マタニティーヨガの紹介も含まれる。すなわち、母体がリラックスすることで、胎児へ良い影響が与えられる効果を意図しているわけである。またコンサートが毎年恒例であるということから、需要が十分にあることも推測される。

次に乳児と音楽の関係については、音楽を聴くことにより、ストレス軽減、泣き止み、言葉の発達など、その効果は様々な角度からの研究で明らかになっている²⁾。また幼児については、幼稚園教育要領解説「表現」の中で、「生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする」、「様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう」とあり³⁾、保育所保育指針第3章保育の内容の項でも同じように「様々な出来事の中で感動したことを伝え合う楽しさを味わう」とある。つまり、生活の中で様々な美しいものや感動したことに出会うことで、それを伝え合うコミュニケーション能力が発達すると考えられている⁴⁾。保育者・教員養成校において、音楽の授業が必須であることから、音楽が保育・教育に不可欠であることの証左と言えるだろう。

これらのことは、家庭生活の中でも発揮される。親子と一緒に音楽を聴く時間を共有することにより、会話が広がり、コミュニケーションを深めるきっかけとなると考えられ、それは人の感性を磨き、言葉で表現する能力を高めることに結び付くと言える。

乳幼児と親を対象にした「親子のためのコンサート」では、例えば大阪フィルハーモニー交響楽団が毎年夏に「親子のためのオーケストラ体験教室」を行っている⁵⁾。0歳児からの親子が対象になっており、演奏と共に子どもたちに楽器体験をさせるという内容になっている。また大阪交響楽団では、「0歳から！親子で楽しむオーケストラ」と題し、「美しく青きドナウ」「サウンド・オブ・ミュージック」などの名曲の生演奏と、楽器紹介を行っている⁶⁾。さらに、先述の岡崎ゆみが行っている「ベビー&ファミリーコンサート」では、乳幼児向けに、音感・リ

ズム感を育てる手遊びを含んだプログラムを行なっている⁷⁾。つまり、「未就学児入場不可」のクラシック音楽のプログラムではなく、「子ども向け」プログラムで構成されている。

加えて、児童生徒が生演奏を聴くことで生ずる効果については、文部科学省が学校等における芸術表現を通じたコミュニケーション教育の推進を図るため、文化庁と連携し、文化庁事業の「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」⁷⁾のメニューとして、「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験」を推奨している⁸⁾。その説明として、「次代の文化の担い手となる子どもたちが、優れた舞台芸術に触れること、又は、一流の芸術家の派遣による講話、実技披露、実技指導を体験することにより、子どもたちの芸術を愛する心を育て、豊かな情操を養い、コミュニケーション能力の向上に資するとともに、文化芸術における優れた才能の芽を育て、将来の観客層の育成を図る事業」⁹⁾とあり、一流の芸術に触れること、芸術家に触れることの効果から、その必要性が述べられている。そして小学生以上になると、乳幼児に合わせたプログラムではなく、「未就学児入場不可」の一般的なクラシック音楽コンサートに入場可能となる。

子どもという事に限らず一般的に、「音楽に国境はない」と言われるように、言語というものが、母国語を使用する人々にとって、一つの限られた意味情報であるのとは異なり、音楽は、その三要素である、「①旋律」「②和声」「③リズム」を合わせて聴くことで、音楽の文化が違っていても、人間の知覚・認知処理能力により、明るい、暗い、楽しいなどの情動を自由に感じることができる¹⁰⁾。このことは、馴染みのない音楽を聴取した時でも起こり、音楽の認知の共通性が見いだされる。三要素で成り立つ音楽と言葉との関係は、胎児、乳幼児に対しても言えることである¹¹⁾。

「音楽聴取が頭痛やがんの痛みを抑制する報告」(Bailey,1983;linoff et al,1982;Pfaff et al,1989)もあり¹²⁾、医学的にも有用である。脳科学の見地からは、「モーツァルトを聴くと頭がよくなる」という

ブームも起き、またモーツァルトに限らず、音楽を聴くことでIQが上昇するという研究、BGMとして聴くより本気で鑑賞する方が脳に刺激が伝わり、その効果が様々な部分で発揮されると言う研究報告もある¹³⁾。以上の事からも、生演奏を集中して鑑賞することの効果は可能性として十分に考えられる。

さらに、ガブリエルソンによる研究では、演奏者が巧みに演奏の変化をつけることで、聴衆がその意図を適切に受け取り、音楽によるコミュニケーションが成立することが明らかになっている¹⁴⁾。つまり、演奏者が演奏に巧みに変化をつける技術を備えていれば、聴衆はより情動を感じられるということである。佐久間・大申(1994)は、演奏に視覚情報が加わることにより、演奏の意図が正確に伝えられることを示した¹⁵⁾。また下迫ら(1996¹⁶⁾,1999¹⁷⁾)は、演奏者の容姿、衣装、舞台の照明などと共に、演奏に伴う演奏者の身体の動き、表情などの視覚的な要素が、演奏者の音楽表現に大きな影響を及ぼしているという研究結果を出している。つまり、生で聴くことは、視覚的な刺激も受容し、演奏の音楽表現を、より効果的に感知することができると言える。このことは、プロの演奏家による生の演奏を聴き、見ることを示している。

様々な研究結果から、年齢に関係なく音楽は人間形成、情操教育、治療に有用であり、訓練された演奏家の音楽を生で聴き、視覚的な刺激として受けることは、さらに有効性を高めると言える。同時に演奏家は、自分たちの磨いてきた技術を通し、表現することで、その役割を果たすことができる。つまり未就学児の入場制限は、多世代に渡る人々が同時に、演奏家によるクラシック音楽の生演奏を聴取するという機会を少なくしている可能性がある。

1-3 研究方法

先行研究を踏まえ、ピアノの演奏家である筆者が、一般的なクラシック音楽のプログラムで、マタニティーコンサート、親子コンサート、未就学児入場可能コンサートの、計3種類のスタイルによるコンサートを実施する。終演後、観客からの感想や意見、

さらに演奏家側の観察を基に、各コンサートの効果について考察を試みたい。

なお、本研究は、(公財)神戸市民文化振興財団におけるアートベンチャー事業2011入選公演として支援を受けたものである。

2. マタニティーコンサート (2回)

2-1 実施概要

筆者は、神戸市のレディースクリニックで妊娠後期の妊婦を対象に行われる「マタニティーコンサート」(表1)に2回出演し、約20分のプログラムを演奏した。このコンサートは、「母親教室」のプログラムに組み込まれている。つまり聴衆は、「コンサート」を目的に訪れているわけではない。

部屋は平面で演奏家と客席は至近距離である。演奏者は1曲ずつ演奏前に曲名だけをアナウンスし、演奏をするという行動を繰り返した。

表1

対 象	妊娠後期の妊婦10名前後
場 所	神戸市西区レディースクリニック内の部屋 (反響板なし)
楽 器	グランドピアノ
入場料	無料

2-2 第1回目マタニティーコンサート プログラム (表2)

表2

開催年月	作曲家	曲 目
2012年3月	モーツァルト	きらきら星変奏曲 トルコ行進曲
アンコール	リスト サンカン	愛の夢 オルゴール

全てのプログラムはピアノ名曲集^{注3)}から取り上げ、演奏家側が考える一般的に「馴染みのある」クラシックピアノ曲とした。アンコールで選曲した「オルゴール」は、演奏会ではあまり取り上げられない曲だが、全体が高い音域で作られ、題名と曲想が合致しており、聴きやすい作品と考えられる。

来場者の観察と感想からみる分析とまとめ

演奏者から遠い席に座る来場者もあれば、反対に演奏者により近い席に移動する動きも見られた。一番後ろに座った来場者は、演奏中もパンフレットを見ており、演奏とは無関係の動きが見られたが、率先してピアノのそばに座った来場者は、演奏中おなかをなでながらじっと聴き入っている様子であった。穏やかな曲想の箇所では、来場者全員が動かず聴き入っている様子で、技術的に華やかな箇所では、指を見ようと背伸びする動きが見られた。

最後の「オルゴール」では、全員がじっと聞き入っていた。胎児は低音を聴きやすいという研究報告があるが¹⁸⁾、母親は高音域の穏やかな曲想に聴き入るといふ反応が見られた。

終演後は「ゆったりとした気分になった」、「お腹の子が眠ったように感じる」、「また聴かせたい」という声があった。

2-3 第2回マタニティーコンサート プログラム (表3)

表3

開催年月	作曲家	曲 目
2012年5月	ドビュッシー	前奏曲集第1巻より 第5曲アナカプリの丘 第7曲西風のみたもの 第8曲垂麻色の髪乙女 喜びの島

第2回目のプログラムは、2012年に生誕150周年という記念年であることから、ドビュッシー作品のみを取り上げた。つまり来場者にとっては必ずしも「馴染みのある」ものではなく、「未就学児入場不可」のクラシック音楽コンサートに通ずる選曲を行なった。

来場者の観察と感想からみる分析とまとめ

来場者はピアノに近い位置から座り始めた。演奏を開始直後、来場者が真剣に見て聴いているという緊張感が伝わり、演奏者の集中力が高まった。1曲1曲演奏し終わるたびに、感嘆のため息や「すごい」という声があがり、来場者が演奏者の技術や音楽を

感じ取っていたと考えられる。

前奏曲集第9曲「亜麻色の髪の乙女」は、プログラム中で唯一、名曲集に単独で収められているが、このほかの曲においても来場者が、聴く集中力を切らして動くなどの行動は特に無く、曲に馴染みが「ある」か「ない」か、ということでは、聴く反応に違いは見られなかった。

2-4 マタニティーコンサートにおける総括

2回のマタニティーコンサートでは、第1回目を一般的なマタニティーコンサートプログラム、第2回目を「未就学児入場不可」クラシック音楽コンサートプログラムとした。「馴染みのない」曲の際に、来場者が退屈して動くなどの行動を演奏家側は予測したが、プログラムによる反応の違いは見られなかった。

演奏を聴くことに興味を示さなかった来場者がいたことについては、あくまで母親教室が主目的であり、マタニティーコンサートが目的で来場したわけではないことが、要因の一つであると考えられる。しかしそのような来場者でも、演奏者に注目し聴き入った曲が「馴染みのない」曲であったことは注目される。

また母親がクラシック音楽の生演奏を、このように半ば義務的に聴取した場合でも、「馴染みのある」プログラムであるか否かに関わらず、リラックスした気分になるなどの効果が見られた。

3. 親子コンサート¹⁹⁾ (4回)

3-1 実施概要

対象：子育て支援センター利用親子（子どもは乳幼児）

場所：公共施設の音楽室

設置楽器：アップライトピアノ

客席：ピアノから1～2メートルの距離で、子ども用のいすと保護者用のいすを並べ、床の一角に乳児が寝転べる小さなカーペットを敷いた

開催時間帯：午前10時半過ぎから約30分

入場：無料

宣伝方法：開催日時、場所、演奏者、演奏予定曲数を印刷した簡単なチラシを子育て支援センター利用者に配布。掲載された演奏予定曲目は、すべてクラシック曲である。

3-2 第1回プログラム (表4)^{注4)}

親の感想から見る子どもの動き

- ・普段じっとしていない1歳の子どもが静かに聴いて手拍子をしたり、楽しそうにしていた。
- ・ピアノに合わせて体を動かしていた。
- ・「面白かった」と言っていた。
- ・意外と退屈せず、楽しそうにしていた。
- ・手をたたいたり、「大きい」と言っていました。途中で飽きたようですが、喜んでいました。

親の感想

- ・子どもに生の演奏を聴かせるのは初めてですが、美しい音色に子どもがうっとりしていて意外で嬉しかったです。

表4

開催日	タイトル	編成	作曲家/曲名
2011/7/8 金曜日	たなばた コンサート	ピアノ4手	ドビュッシー/「小組曲」より小舟にて
		歌 ピアノ伴奏	「うみ」、「たなばたさま」
		歌 ピアノ4手伴奏	「あめふりくまのこ」「手のひらを太陽に」 「夏の思い出」
		ピアノ4手	モーツァルト/4手の為のソナタ K.521 第1楽章 モーツァルト/2台の為のソナタ K.448第1楽章 (4手編曲)
	アンコール		モーツァルト/アンダンテと変奏曲

- ・コンサートがあるとは知らず来て、こんな素敵なコンサートを聴けてラッキーでした。
- ・子どもと一緒に音楽を楽しめていい時間を過ごせました。
- ・子どもと一緒に歌える歌がもっとあると嬉しいです。

総括

11組の親子が来場した。1曲目のドビュッシー作品では、ピアノを弾き始めると子どもたちはこちらを向き、聴き入っている様子であった。中には、ピアノの傍に寄ってくる子どももいた。モーツァルトの曲が始まると、音楽に合わせて体を揺らしたり、曲のテンポに合わせて行進を始める子どももおり、ドビュッシーの曲より古典派の曲が、ある程度テンポが一定で合わせやすいと言える。

演奏家側からの観察と、演奏しながらの客席の印象、「弾きやすい」「弾きにくい」という奏者感覚から、子どもたちが退屈しているのではないかという不安や、騒がしくて困るという印象はなかった。子どもは、目の前で演奏しているものに反応し、クラシック音楽を子どもなりに楽しみ、表現している様子である。

一方で、親の感想からは、生まれて初めて生の音楽に触れさせた喜びが多かったが、さらに一緒に楽しむ為に、子どもが知っている歌をもっと多く歌わせて欲しいとの希望があり、クラシック音楽以外の要素を親が求めていることが言える。

3-3 第2回プログラム (表5)^{注4)}

親の感想から見た子供の様子

- ・子どもが騒いでしまった。

表5

開催日	タイトル	編成注)	作曲家/曲名
2011/8/4 木曜日	サマー コンサート	ピアノ4手	ドビュッシー/「小組曲」より小舟にて
		ピアノ	「みずあそび」「しゃぼんだま」「夏の思い出」
		ピアノ4手	ブラームス/「ハンガリー舞曲集」より第1, 3, 5番
	アンコール		ハーライン/星に願いを ドビュッシー/「小組曲」よりメヌエット

- ・美しい音色にうっとりしていた。
- ・じっとおとなしく聴いていた。
- ・のりのりで体を動かしていました。
- ・子どもが静かに聴いており、何か感じるものがあったのだと思う。

親の感想

- ・久しぶりにゆっくり演奏を聞かせてもらえて気分転換になった。
- ・子どもと一緒に楽しめた。
- ・美しいピアノの演奏を聴けてとてもうれしいです。
- ・テレビの曲もやって欲しい。
- ・ピアノがとってもきれいで良かったです。
- ・子ども連れで聴けるコンサートがなかなかないの
でいい経験になりました。

総括

12組の親子が来場した。第1回目と同じ曲で開始したが、第1回目に聴取した者においても「聴いたことがある」といった反応は、特に見られなかった。ブラームスの「ハンガリー舞曲」といったロマン派の舞曲においても、子どもは特徴あるリズムに反応を示し、体を揺らす表現をしたことから、音楽を感じ取っていると言える。

演奏家側から「馴染みのある」想定で「星に願いを」を採り上げたが、親の集中力は感じられる一方で、子どもがこの曲に対し特に反応している様子はなかった。演奏家の意識は、クラシック音楽ではない曲を弾く際には、一音一音にこだわる演奏というよりも、曲自体を演奏家自身も「楽しむ」という目的に変化したと考えられる。

表6

開催日	タイトル	編成	作曲家/曲名
2011/10/1 土曜日	オータム コンサート	フルート2+ピアノ	エルガー/愛のあいさつ
		歌 ピアノ	「とんぼのめがね」
		歌 フルート ピアノ	秋のメドレー
		ピッコロ2	ピタゴラスィッチのテーマ曲
		フルート2+ピアノ	ドップラー/アンダンテとロンド
	アンコール		チャイコフスキー/「くるみ割り人形」より 葦笛の踊り、花のワルツ 金平糖の踊り

3-4 第3回プログラム (表6)^{注5)}

親の感想から見る子どもの様子

- ・子どもがじっと見ていた。
- ・楽しそうに聴き入っていました。
- ・子どもが演奏する真似をしていました。
- ・最初は緊張して聴いていたようだが、後半は踊り出した。

親の感想

- ・こんなに近距離で聴ける機会がないので、とてもうれしかったです。貴重な時間をありがとうございました。
- ・とてもよかったです。子どもを連れてプロの演奏を聴けることはないのでもいい時間でした。
- ・フルート、ピッコロ、ピアノの息の合った演奏でいい音色でした。ありがとうございました。
- ・親しみのある曲で楽しい時間でした。色々な楽器でよかったです。

総括

11組の家族が来場した。今回は、ピアノだけではなく、フルート・ピッコロを加え、デュオないしトリオという異なる演奏形態を取り入れ、プログラムには、前回リクエストにあったテレビ番組のテーマ曲を含めた。この曲に対しては、親たちからどよめきが起き、大きな反応が見られた。一方で子どもは、2本のピッコロの響きに「かわいい音だね」と音そのものに反応し、にこにこしながら聴いていた。

演奏家側の、各曲を演奏しながらの印象を比較し

た際、「馴染みがある」「馴染みがない」という区分の聴衆の反応は、最初には見られるものの、音楽が続くにつれ、曲をいかに美しい音色で届けるかが、子どもにとっても親にとっても反応の分かれ目のポイントとして重要であると考えられる。

子どもが演奏に対して率直な反応を目の前で示すため、演奏家は一つ一つの音に集中し、より高い質の音楽を届ける緊張感を伴う演奏となったと言える。

プログラムがクラシック音楽であろうと、それが馴染みのある曲であるか否かに関わらず、子どもの反応に大きな違いは見られない。演奏後にフルートを演奏する真似をする子どももおり、視覚的な印象と共に、美しいものは美しいと感じ、それを表現することができると考えられる。

今回の終演後の親の感想には、子どもの様子よりも、3人の演奏家によるクラシック音楽コンサートを聴くことができたことへの、親自身が受けた感激が多く記されていた。このことから、未就学児の子ども連れにとっては、複数の楽器による生演奏は、聴く機会が減多に得られないことがうかがえる。

3-5 第4回プログラム (表7)

親の感想から見る子どもの行動

- ・まるで子守唄を聴いているかのように静かに聴いていた。
- ・じっとはしていなかったが、楽しそうに聴き入っていた。
- ・子どもはうろうろしていたが、音楽を楽しんでいる動きだった。

表7

開催日	タイトル	編成	作曲家/曲名
2012/3/2 金曜日	スプリング コンサート	ピアノ	ショパン/プレリュードより第7番
		歌 ピアノ	「うれしいひなまつり」「春が来た」
		ピアノ	モーツァルト/きらきら星変奏曲
			リスト/愛の夢
	ドビュッシー/喜びの島		
アンコール	ドビュッシー/亜麻色の髪のおとめ		

- ・おとなしく聴いており、心地よかったのだと思う。
- ・おとなしく聴き入っていた。

親の感想

- ・とても穏やかな気持ちになった。ありがとうございました。
- ・久しぶりのクラシックで、子どもの発育にもいいと思うのでよかったです。
- ・生の演奏が聴けてよかった。
- ・普段聴くことができないので親子でいい刺激になりました。
- ・ピアノの美しい音色を聴くことができて幸せでした。
- ・とても楽しかった。またこのような機会を設けていただきたいです。

総括

17組の親子が来場した。ただし、10組は以前からコンサートへの来場希望を示しており、それ以外の来場者は、隣接の教室で行われた講座後、たまたま来場した状況である。以前から希望していた10組の親子は、演奏中常に演奏者を見つめ、演奏を聴き入っていたが、それ以外の来場者の多くは、親同士が音楽に関係なく話し込み、その子どもも自由に遊んでいる様子が見られ、来場者のコンサートを聴くことへの意識の違いが、客席の雰囲気を作ると言える。

ある子どもは、すぐ近くで演奏する演奏者に興味を持ち、ピアノの真横に来て、にこにこ笑いながらじっと指の動きを観察していた。このことから生で演奏を聴く体験が、演奏家と直に触れ合い、音色や姿を近くで感じる事が出来る機会であることを再

確認した。

3-6 親子コンサートにおける全体の考察

この企画の軸は「プロの演奏家が提供する生のクラシック音楽コンサート」にある。4回にわたり、クラシック音楽の聴取中、母親の膝に座っている乳児はおとなしく見入っており、幼児においては、音楽に合わせて体を動かしたり、行進する様子などが見られた。生の音楽は、聴覚だけではなく、視覚的な刺激も与えていると考えられる。演奏家と子どもが至近距離で接することで、さらに音楽への親近感も増したと見られる。

演奏者は、保護者と子ども両方に視線を合わせ、楽器紹介や、作曲家のエピソード、曲の解説を、ごく普通の口調で加えたが、乳幼児も視線を演奏者に向けていた。

それぞれの総括から、親においては、子どもと一緒に生の音楽に触れられることへの楽しさや嬉しさに加えて、子どもが知っている曲を演奏してほしいという希望を持っているが、子どもは、クラシック音楽でも楽しさを体で表現するなどの行動から、その音楽の効果は得られていると考えられる。

プログラムについては、親はどの曲も親しみやすいと捉え、当初の「クラシックは別世界」という考えが変わり、きれいな音や奏者同士の呼吸を感じることで、馴染みのない曲でも「親しみやすい」という印象を得ていた。また第3回目は土曜日だったこともあり、来場者に父親の姿が見られたのも特徴的であった。

保護者と子ども一緒にでの音楽体験は、リラックスした気分を促されたり、子どもの意外な反応を見る

ことができたり、子どもと「一緒に」音楽を楽しむことができ、有意義な時間を提供できる機会と言える。また本格的なクラシックコンサートプログラムにおいて、大人が馴染みのない曲に対し、「退屈」と先入観を持って音楽を聴く一方で、子どもたちにとっては、全てを「音楽」ととらえ、視覚的な刺激を伴って興味を持って聴き入っている。コンサート後も、楽器を演奏する真似を行っている子どももあり、演奏家による生の演奏を聞くことは、子どもの心を動かす体験として意義があると言える。

聴衆が、息の合った演奏や心に響く音色に感動できることは、プロの演奏家が、自分の音楽や音色にこだわり、研究を重ねてきた芸術を提供することから生まれるものと考えられる。演奏家側においても、子どもが音楽に反応する様子を見ることから、楽しさと新鮮さを感じられたと考えられる。

4. 「未就学児入場可能」クラシックコンサート

4-1 実施概要

演奏場所と費用の確保

(公財)神戸市民文化振興財団におけるアートベンチャー事業2011に応募した。書類審査(2011年11月)、書類審査通過後のプレゼンテーション(2011年12月)での企画概要は次の通りである。

企画概要(表8)

表8

①一般的に未就学児入場不可のクラシックコンサートに「0歳から」入場できる
②プロとして演奏活動している演奏家が演奏する
③ピアノ、フルート、ピッコロを使い、ソロ、デュオ、トリオという様々な編成の音楽を伝える
④プログラムは、馴染みのあるクラシック曲と一般的になじみはないが演奏家がぜひ紹介したいクラシック曲とする
⑤プロが提供することにこだわり、0歳児から有料とする

対象：限定なし

タイトル：「0歳からのクラシックコンサート」

「0歳からの」とつけることで、「未就学児入場不可」のクラシック音楽コンサートではないことを

示した。静かにクラシックコンサートを聴きたい客層に対しても、客席に乳幼児がいることを事前に認識してもらおうという意図を含めた。さらに「クラシックコンサート」と名付けることで、演奏プログラムが「子ども向け」ではなく、クラシック音楽であることを強調した。

宣伝：宣伝方法は、(公財)神戸市民文化振興財団のHP上、同財団無料発行紙C情報にコンサート情報を掲載。さらに、約1000部のチラシを神戸市内の区民センターに配布。

実施内容(表9)

表9

タイトル	アートベンチャー事業2011入選公演「0歳からのクラシックコンサート」
演奏者	フルート 上野博昭 (大阪フィルハーモニー交響楽団) フルート&ピッコロ 奥本華菜子 (大阪交響楽団) ソプラノ 山守美由紀 (関西二期会準会員) ピアノ 戸川晃子 (筆者、ドイツ国家演奏家)
日時	2012年8月18日(土)午後2時開演
場所	神戸市東灘区民センター大ホール
入場料	おとな 1000円 こども(0歳~小学生) 500円
支援	(公財)神戸市民文化振興財団
後援	神戸市、神戸市教育委員会、神戸音楽家協会、神戸日独協会、京都市立芸術大学音楽学部同窓会“真声会”

プログラム(表10)

各演奏家の紹介と楽器紹介をするため、それぞれの演奏楽器によるソロの曲を取り入れた。各編成で、その編成の為に作られたオリジナルの曲と、オーケストラ伴奏をピアノに編曲したものを取り上げ、楽器演奏の可能性を伝えるプログラムとした。

実施結果^{注6)}(表11)

未就学児の行動

- ・子ども自らが演奏者の指が見えるところまで席を移動していた。
- ・曲目に問わず、興味深く鑑賞していた。

表10

	作曲家/曲名	編成	編曲/ オリジナル
第1部	エルガー/愛のあいさつ	フルート2+ピアノ	編曲
	ビゼー/アルルの女より「メヌエット」	フルート+ピアノ	編曲
	ダマレ/白ツグミ	ピッコロ+ピアノ	オリジナル
	ドビュッシー/喜びの島	ピアノ	オリジナル
	ドップラー/アンダンテとロンド	フルート2+ピアノ	オリジナル
第2部	夏の思い出、夏のメドレー	歌+ピアノ	編曲
	アーン/クロリスへ	歌+ピアノ	オリジナル
	プッチーニ/オペラ「ジャンニ・スキッキ」より「私のお父様」	歌+ピアノ	編曲
	チャイコフスキー/くるみ割り人形より「マーチ」「葦笛の踊り」「花のワルツ」	フルート2+ピアノ	編曲
アンコール	ふるさと フルード2+歌+ピアノ+客席	フルード2+歌+ピアノ	編曲

表11

	こども	おとな	合計
うはらホール チケットセンター	16名	23名	146名
前売り券(招待含む)	39名	68名	
当日券	11名	62名	73名
合計	66名	153名	219名

- ・ホールの通路で音楽に合わせて踊っている幼児がいた。
- ・曲に乗ってダンスしたり、聴き入ったりしていた。
- ・じっとステージを見ていた。
- ・フルートの演奏が始まるとすぐに同じようにフルートを吹く真似をしていた。

親の感想

- ・普段レッスンで言われたことが素晴らしい演奏と姿で一気に身についた。百聞は一見に如かず。こどもの様子を見て、本物に触れさせる大切さを身にしみて感じた。私も久々に美しい音色を聞いて癒されました。
- ・私自身も久しぶりに膝に乗せたわが子と一緒に美しいクラシック音楽を楽しめた。2歳にも満たない息子がじっと集中して聴いている姿に感無量で途中で涙がこぼれました。
- ・演奏者のあたたかな音色がばたばたした日常を忘

れさせてくれました。同じように感じているお父さん、お母さんも多いと思います。

- ・私の両親と子どもの親子三代で聞きました。素敵なコンサートで久しぶりの生の音楽に触れて改めて音楽が好きだと思いました。多世代で合唱できたのもよかったです。
- ・乳幼児をつれていけるクラシックコンサートをネットで探したが、なかなか見つけられなかった。またこのような企画をしてほしい。

大人だけで鑑賞した感想

- ・ホールで楽しんで聴いている子どもの姿を見ててもうれしい気持ちになりました。
- ・素晴らしい企画でした。子どもたちの様子を見て、音楽の力、本物の力を感じました。

演奏の間のトークで、素人でも曲に入りやすかった。子どもたちがにぎやかでいつもと感じが違った雰囲気だったが、次回も楽しみにしています。

- ・とても楽しいコンサートでした。このようなプログラムをまたぜひやってください。ホールの子どもの様子を見て、子どものおけいごとや心の成長には、本物に数多くふれること、できるだけ感性と心をやわらかく感受性の強い幼いときが大切だと思います。親たちにとっても、心洗われるような、生き返ったような贅沢な時間だったの

ではないでしょうか。

- ・今日の音楽会は楽しかったです。ありがとうございました。静かに聴いている子、静かに遊んでいる子、好きにしている子、中には、泣いたり叫んだりする子もいたけれど、皆、結構音楽を楽しんでいました。幼児から自然に生のクラシックを楽しめる機会がもっとあるといいですね。
- ・じっとできない幼児が気になった。しかし、ほとんどの子どもと保護者が音楽にしっかり聴き入る様子を見て、0歳からという面白い企画は本当に良かったと感じる
- ・子どもの反応を見ながらの鑑賞は興味深い。継続的にやっていくことも大切である。主催者は大変だろうが、子どもたちに本物を見せることは意味があるので次回も期待したい

コンサート後の子どもの様子

- ・ピアニストがステージ上でピアノ奏法について説明したことを覚えており、帰宅後遊びに行くことも忘れ、練習に励んでいた。レッスン後にも見られない様子で驚いた。
- ・子どもが楽器を演奏する真似をするようになった。
- ・帰りのエレベーターで一緒になった4歳くらいの女の子が、本当に嬉しそうに、楽しかったねと何度も言ってニコニコしていたのが、とても印象的でした。

演奏者の意見、感想

- ・素直な子どもの反応に演奏への真剣さが増し、集中力、演奏の質は高かったと思う
- ・客席がざわざわしている場面や子どもが泣いている場面でも、それはほんの一部の聴衆であり、きらきらした目で演奏者を見ている子どもたちは最初から最後まで聴き入っていた。
- ・拍手のタイミングから、この聴衆は演奏を心で聴いてくれているとはっきりわかった。また、子どもたちも含め、お客様が楽しんでる様子を受け、こちらもとても楽しかった。
- ・オーケストラによる親子コンサートは規模が大き

く、迫力があるが、一度に多種類の楽器を紹介する。今回のように一つの楽器の特徴を存分に発揮し、紹介できることは強く印象付けられよかったと思う。

4-3 考察

以上の感想や意見をふまえて考察を行なう。

「演奏会は静かに聴くべき」という教えを理解できない乳幼児においても、演奏家を近くで見ながら生の演奏を聴くことは、その行動や表情から喜びや楽しみを受容し、音楽の効果を得られるものであると言える。

長時間のプログラムをじっと動かずに聴くことは、乳幼児に限らず大人といえども困難な事である。しかし子どもが退屈しないようにと、音楽以外の要素を多く含む「子ども向け」公演をするのではなく、今回のプログラムのように、クラシック音楽にこだわる一般的なコンサートにおいても、乳幼児は感じたままに、それなりに楽しむことができると言える。また未就学児入場が可能であれば、子どもと一緒に美しい音楽に触れる体験をしたい、両親や祖父母もコンサートに足を向ける機会となり、その時間を共有することで、一体感と体験をもとにしたコミュニケーションも、十分に予測できる事である。

演奏家は、0歳の乳児がプロの提供する芸術に触れるということは、すなわち乳児が初めて触れる生の演奏が、自分たちが提供する音楽であることから、自覚を持ち、音楽にさらなる磨きをかける事に繋がったと言える。責任感を持って提供する証として、音楽を聴取する0歳から有料としたことは理解された。

「未就学児入場可能」クラシック音楽コンサートにおいて、多世代にわたる来場者がともにクラシック音楽を楽しむ事が出来、また親は子どもが音楽に合わせて動き、興味を持つ様子を見ることで、クラシック音楽の効果を感じ、そのような子どもを見た、親以外の大人においても、楽しいという感覚を得ることができると考えられる。

5. 結論

本研究では、プロの演奏家が「未就学児入場不可」のコンサートにおいて提供するようなクラシック音楽プログラムが、どの世代においても有用であるということ、マタニティーコンサート、親子コンサート、未就学児入場可のクラシックコンサートという、3つスタイルのコンサートで実践し、その効果について検証した。「子ども向け」のプログラムではなくとも、各総括および考察で既に述べたように、クラシック音楽を生で聴くことで、子どもは音楽を感じたままに体で表現をし、興味を持って集中して聴くことができるといった効果があった。またクラシック音楽プログラムにおいて、子どもが騒ぐのではないか、子どもが退屈するのではないか、という開演までの親の不安は、終演後の「意外」に子どもが楽しんでたという感想の多さから解消できたと考える。

このように、保護者や他の来場者から見た、クラシックコンサートにおける子どもへの影響を確認したが、「未就学児入場不可」のクラシック音楽コンサートに比べて、騒がしい状態にあったのは事実である。しかし、騒がしく、かつ有料であっても、生演奏でのクラシック音楽プログラムを聴きたいという希望が、「未就学児入場可能」コンサートの来場者数には表れており、このような多世代に渡る客層が時間を共有するコンサートを、多くの人が望んでいることが示された^{注7)}。また演奏家にとっては、「未就学児入場可能」のコンサートにおいて、子どもが演奏の感想を即座に率直に行動や表情に示すことから、一音一音にこだわる演奏を提供する意識と、泣き声が聞えても集中力を切らさないことが要求されることになった。しかしその時々最高の音楽を演奏するという点については、「未就学児入場不可」のクラシック音楽コンサートと、変わりはないと言える。

今後の課題としては、来場者の感想・意見や、演奏家側からの観察だけでなく、曲ごとの未就学児の行動を録画により分析する事や、継続的にコンサ-

トを実施した場合の未就学児への効果の考察など、より有効な研究方法を通じて、入場対象を限定しないクラシック音楽コンサートの効果を、さらに詳しく検証していきたいと考えている。

注釈

- 注1) 三省堂編修所編：広辞林 三省堂 東京 1996
- 注2) 堀内久美雄編：新音楽辞典 楽語、音楽之友社 東京 1977
- 注3) ヤマハミュージックメディア社編：「先生が選んだ名曲選」Ⅱ巻Ⅲ巻 ヤマハミュージックメディア社発行 2005 東京
- 注4) 共演 瀬川和子教授
- 注5) 共演 上野博昭氏、奥本華菜子氏
- 注6) C情報紙上で10組の招待プレゼントを募集したところ、20組の応募があったことを加筆しておく。
- 注7) 筆者がこれまで経験してきたコンサート、すなわち「未就学児入場不可」とした有料コンサートでは、コンサート前に動員数が予測できた。つまり当日券で来場という期待は少ないと言える。しかしこのコンサートでは、当日券による来場者が70名以上に及び、予測を大きく上回った。知名度の高い演奏家以外の有料クラシック音楽コンサートでは、演奏家自身の知人による口コミで動員を見込み、今回のような宣伝方法を取っても、全く見知らぬ聴衆に囲まれることは少ないが、今回のような動員の結果から、このような企画に興味を持つ人が多いことがうかがえる。また未就学児が入場可能のコンサートにおいて見られるような「親子のためのコンサート」ではないため、乳幼児を連れた親子だけでなく、大人だけでの来場者が多いことも明らかになった。

参考・引用文献

- 1) 和光堂 HP:<http://community.wakodo.co.jp/campaign/2012/pianoconcert/0615/index>.

- psp.html 2012年9月19日最終アクセス
- 2) 呉東進著：赤ちゃんは何を聞いているの？－音楽と聴覚からみた乳幼児の発達，北大路書房，1－125，京都，2009
 - 3) 文部科学省：幼稚園教育要領解説 平成20年10月 pp1～158フレール館 東京 2010
 - 4) 厚生労働省：保育所保育指針＜平成20年告示＞ pp1～35 フレール館 東京 2009
 - 5) 大阪フィルハーモニー：<http://www.osaka-phil.com/news/detail.php?d=20120518> 2012年9月19日最終アクセス
 - 6) 大阪交響楽団：http://www.maytheater.jp/series/1210/1031_orchestra.html 2012年9月19日最終アクセス
 - 7) 文化庁 HP：http://www.bunka.go.jp/geijutsu_bunka/05kodomom/index.html 2012年7月30日最終アクセス)
 - 8) 文化庁 HP：<http://www.kodomogeijutsu.com/> 2012年7月30日最終アクセス
 - 9) 文化庁 HP：<http://www.kodomogeijutsu.com/communication/index.html> 2012年7月30日最終アクセス
 - 10) 谷口高士：音は心の中で音楽になる pp1～229 北大路書房 京都 2000
 - 11) 正高信男：子どもはことばをからだで覚える pp1～184 中公新書 2001
 - 12) 谷口高士：前掲書
 - 13) 古屋晋一：ピアニストの脳を科学する pp3～239 春秋社 東京 2012
 - 14) 谷口高士：前掲書
 - 15) 佐久間真理・大串健吾：打楽器演奏における演奏者の意図の伝達－視覚と聴覚の相互作用 日本音響学会誌50 pp613-622 1994
 - 16) 下迫清加・大串健吾：ピアノ演奏の印象判定における視覚と聴覚の相互作用 音楽知覚認知研究2、pp27～37 1996
 - 17) 下迫清加・菊池正・大串健吾：ピアノ演奏の印象判定視覚情報の及ぼす影響 日本心理学会第63回大会発表論文集 1999
 - 18) 呉東進著：前掲書
 - 19) 戸川晃子：乳幼児の生の音楽体験の意義と課題その1 pp542～543 全国保育士養成協議会第51回研究大会研究発表論文集 東京 2012